The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	外国語学部の情報活用基礎を担当して
Author(s)	杉山, 善明
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2015, 16, p. 29-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70390
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

外国語学部の情報活用基礎を担当して

杉山 善明 （外国語学部 外国語学科）

はじめに

外国語学部の情報活用基礎を担当することになったのは 2010 年度後期で、2012 年度からは前期後期とも担当するようになり、現在に至る。担当を引き受ける際に聞いた話では、外国語学部におけるパソコン実習室を使った授業は入学年度に受講するこの半期授業が唯一であるとのことで、授業構成と課題内容を考えるのに苦心した。対象となる外国語学部生は、「他言語を使った情報伝達」という以下のような情報処理過程を繰り返すとみなすことができる。

［入力］日本語で自分の考えを組み立てる

［処理］学んだ知識を使って専攻語に意訳する

［出力］専攻語を使って他者に伝える

そこで、「情報活用」の主題を「他者に見せることを意識した資料作成と情報伝達に必要な工夫」と設定し、授業を構成した。課題については、情報の生成から整理と伝達への流れを意識して内容を選定した。

課題内容を実現するに当たって、同時開講される 5 教室の内、最も定員が少ない教室で授業を実施したいという要望を主担当教員に伝え、当時の担当教員の皆様に御協力いただいて、45 名定員の第 4 教室で担当することとなった。本稿執筆時点で前期開講 4 回と後期開講 5 回の授業を終えた経験から述べたいと思う。

情報教育システムの利用状況

第 4 教室は 45 名定員であるが、ティーチングアシスタントの大学院生 2 名と万一の端末不具合に対処するための予備パソコン 1 台分を除いて、大抵は 42 名の学生が受講する。これまでの授業では、ネットワーク等のソフトウェア的な障害はあったが、教室端末の物理的な故障に遭遇したことはなかったように記憶している。

学生パソコン 2 台につき 1 台の教員画面提示端末が設置してあるおかげで、細かい説明もしやすく、今後も維持願いたい。ただ、教壇側に注目させて説明を聞かせたい場合は、プロジェクターのスクリーン画面だけに表示して、教室内の教員画面提示を非表示にした方が確実に注目させることができる。しかしながら、教卓の操作盤にそのような機能はなく一括切り替えすることができないため、そういった仕様であればなと思いながら、学生に電源の「入／切」の切り替えを口頭で指示している。

また、以前は教室の室内空調が個別に温度設定できなかったため、夏場は暑く冬場は寒い中で授業をする日もあったが、パソコンが刷新された昨年度あたりから自由に設定できるようになり、新しくなったマウスやキーボードとともにより快適な環境で学生が授業を受けられるようになっている。

授業支援システムの利用状況

授業教材の提示と配布並びに課題の提示と回収は、2012 年度前期までは WebCT を、2012 年度後期からは CLE を利用している。また、出欠確認は 2014 年度前期までは、出欠集計システムを利用していた。機器更新による廃止後は CLE を使うことが推奨されているが、現時点では同等ではなく、参考程度にとどまっている。

CLE で出欠集計するには、［利用状況］と［成績管理］の大きく 2 つの機能が利用できる。WebCT の時と概ね同じ仕様で、使い勝手はほぼ改善されていないように思う。［利用状況］では、CLE が管理する ID を識別に使用し、任意の系列追加はできない。［成績管理］では、学籍番号等の系列追加ができ、系列の選別と並べ替えもできる。CLE の管理 ID は、氏名と大阪大学個人 ID の順で構成されており、学籍番号は含まれない。情報活用基礎のような数百名の登録学生を複数グループに分けて同時開講する授業では、学生を学籍番号で区切って分担が決められ、各教員は担当学生だけ抽出する必要がある。したがって、学籍番号による並べ替えや登録グループ単位での選択機能がないと、担当学生の抽出に負担がかかる。残念ながら、［利用状況］にはそれらの機能がなく、出欠確認には使えないと言わざるを得ない。なお、［利用状況］＞［コースレポート］にある「グループ内のユーザアクティビティ」は、単に登録グループ間の利用割合を表示するだけで個別グループを選択する機能ではなかった。

一方、[成績管理] > [成績管理全体] を見ると、登録学生毎に「最終アクセス」項目があるが、日付しか表示されない。そのため、授業開始前と授業終了直後の2回確認して差分をとれば授業時間内に CLE を閲覧したことはわかるが、授業教室内で授業終了まで在室していたかどうかまではわからない。ただ、メニューバーの [管理] > [スマートビュー] から登録グループで学生を選別することができるので、あらかじめ担当学生のみのグループを作成し、表示列に学籍番号を追加しておくことで、担当学生一覧を学籍順で確認することができる。

ところで、[利用状況] > [コースレポート] にある「単一コースの学生の概要」を見ると、学生単位で総閲覧時間数とコンテンツ毎の「最初のアクセス日時」が参照でき、閲覧開始時間を調べることができる。当授業で使用しているのは、「コンテンツフォルダ」「ファイル」「項目」「課題」だけであるが、この中で個別表示されるのは「コンテンツフォルダ」と「課題」のみであった。したがって、授業日毎にフォルダを作成して教材を提示していれば、授業日の「コンテンツフォルダ」行でその授業の利用開始日時を、各課題の「課題」行でその課題の初回提出日時を特定することができる。さらに、個々の教材「ファイル」や指示「項目」に対して「統計レポートの表示」を行うと、「コンテンツ使用状況の統計」が確認できる。どちらも[利用状況]と同様に数百名の全員一括選択か、名前順で20行または5行表示に固定された選択窓の中で担当学生を一人ずつ手動で選択するしかない。前者の「単一コースの学生の概要」が [成績管理] の学生項目から呼び出すことができればと思うと、残念な仕様である。

以上のことから、2014年度前期まで運用されていた出欠集計システムと同等の簡便さで出欠確認を行うことができないのが実情である。具体的な出典を確認できないが、文部科学省の通達で出席を直接的に成績評価で加点することが禁止されているので、採点上は不要かもしれない。一方で、大学からは「欠席が続く学生の把握」を求められることから、授業終了後に [成績管理] > [成績管理全体] > [スマートビュー] で担当学生グループの「最終アクセス」一覧を毎回確認するというのが、以前の出欠集計に最も近い対処法だと考えられる。しかしながら、授業中に各座席の着席状況を学籍番号で確認でき、履歴保存もできるのが理想的ではある。

提出課題の回収については、以前の WebCT も現在の CLE もさほど変わりなく使用している。学生毎に個別の課題ページから提出ファイルを一つずつダウンロードできるが、作業量が多くて手間がかかるので通常は課題毎に ZIP 形式で圧縮された一つのファイルで一括ダウンロードする。その際、学生が実際に提出した日時やファイル名のままで一括回収することはできない仕様なので、それらを保持したい場合は提出ファイルを ZIP 形式にするか、採点時に多少の前処理をする必要がある。WebCT では、課題名やフォルダ名などに日本語文字が含まれていると、ファイル解凍ソフトによっては正常にファイルが取り出せないこともあった。ASCII 文字だけで作成すれば問題なく、CLE で検証していないが、今のところ学生が間違って ASCII 文字以外のファイル名で提出した際も正常にファイルが解凍できている。学生が思いのほか提出ファイル名に気を使わないのが、悩みの種である。

授業の実施状況

毎回ほぼ全員が連文節変換を知らない等、受講学生の反応に驚くことはいつも多いが、パソコンの使用経験がほぼない学生のなだらかな増加が気になる。中学高校にもパソコン実習があると聞いているだけに不思議であるが、元々パソコン嫌いの学生でも受講終了後にそつなく使えるようになることを目指した授業をしているので、最後の総合課題では皆それなりに Word と Excel をうまく使って報告書が作成でき、成果を実感している。

紙面の都合で詳細は省くが、各課題をやり進めると、情報の使用・利用・活用と順に経験していくことになる。受講した学生にとって、日常の気づきを活用するための一助になっていることを切に願う。

おわりに

授業担当初年度並びに WebCT から CLE へ移行した2012年度は、豊中教育研究棟にて当時 WebCT ヘルプデスク担当をされていた SCSK 株式会社の吉田氏に、授業終了後にも度々対応していただいた。対面で実際の画面を見ながらその都度問題点を質問することができたことで、疑問の解消と授業での利用を円滑に進めることができた。この場を借りて吉田氏並びにサイバーメディアセンターのシステム運用関係者の皆様にお礼申し上げる。